

会誌編集委員会

女子部

Number
1

「会誌編集委員女子部」発足にあたって思う —情報社会の迷える子羊のために私たちのできること—

上智大学 高岡 詠子

塚本編集長の案で、会誌編集委員会女子部なるものが発足。このコーナーは会誌編集委員会の女性有志によるエッセイコーナーで、日頃のITに関する話題、世間のホットな話題など、独自の目線から思っていることをズバッと書くというもの。今の学生のホットな話題についてインタビューしてみた。すると、サークル（体育会含む）とバイトというのが大半の答え。時代は過ぎてあまり変わらないんだというのが率直な感想。そのほか、2048というゲームが流行っていると言う。なんでもイタリアの19歳の若者が作ったオープンソースのゲームらしい。この2048という数値に敏感に反応してしまった私。ここから話を展開してみる。2048= 2×2^{10} と想像するのはまだまだ少数派でしょう。情報社会では当たり前と私たちが思っていることが社会では当たり前でないことは多い。たとえば表計算ソフトは多くの人が使っているけれど、シートが複数存在することを知らずに2枚目以降のシートに書かれていることを知らずにいて話についていけないとか、数日前のIEの脆弱性に対応するため、大学のメディアセンタではすでに授業ではIEを使わずFirefoxを使うことをオフィシャルに推奨する一方で、家庭でコンピュータを使う人にはFirefoxという単語にまったくなじみがない、何

をしたら危険なのかどうすれば安全に使えるのが不安…など。学校でのITリテラシー教育は少しずつ改善されてきていて、社会に対してもIPA（情報処理推進機構）を始めいろいろな取り組みが始まっているけれど、まだITを安心して使えない人たち—情報社会の迷える子羊—がいるという現状を見て、私たちにできることは何かと模索する毎日。まずは、各自が職場以外の場所でも気付いたことを伝える努力が必要かも…と思う今日このごろ。そういえば、会誌「情報処理」へのデビューは学生のころ。私の恩師で今は亡き中西正和先生からの依頼で「会員の声」という欄で「情報科学・工学、私はこう考える：コンピュータ・サイエンスの未来像、私はこう考える」というタイトルでコラムを書かせていただいたときだった。そこからの引用「他の学問との融合によるはかりしれない可能性と人類をプラスの方向へと導く使命を持つことによって、CS（Computer Science）は明るい未来像を描くであろう」。そのころから私の考えていることもあまり変わっていないことに気付く。最後に編集委員モードに戻って、「情報処理」が、情報社会の迷える子羊のため、情報社会の未来のために少しでも役立つことができますように！

編集委員とPTA

筑波大学 五十嵐 悠紀

今年（2014年）から会誌編集委員になりました。このような委員という役割をあまり経験していないのでどのように貢献できるか不安ではありましたが、研究や授業などとは違ったお仕事を引き受けるのも自分の経験になるかと、お引き受けさせていただきました。

私は日本学術振興会の研究員をやりながら、2人の子育てをしています。男子2人なので、「子育て大変でしょう」とよく言われますが、長男は、折り紙やペーパークラフトが大好きなインドア派。次男は少し腕白ですが、ブロックやパズルが大好き。家にいても大人しく遊んでくれる2人なので、一緒に家にいる時間もリビングの傍らで遊ばせながら、私はノートPCを開いてプログラミングをしたり、論文の図を作ったり。つつい子どもを後回しになりがちな生活を送っていました。

それを打破するために、昨年度、長男の幼稚園でPTA役員を引き受けました。ベテランの会長さんのもと、1年間副会長を務め、この春任期を終えたばかりです。1年間、役員をやったことで、幼稚園のことはもちろん、幼稚園で過ごす子どもの様子も、そして自分の子どもの様子もとてもよく見えるようになりました。この役員の仕事、言ってしまうと、前年度までを踏襲して同じ

ような行事を同じ時期にやってしまうと一番楽なのです。けれど、これまでになかったイベントを提案したり、これまでのやり方をITでちょっと楽にしたり。何をしたら幼稚園児は喜ぶかな？と毎回あれこれ想像しながら、いろいろ新しいことを提案したり、企画したり、実践したりすることは、大変ではありましたが、楽しい面もとても多く、やりがいのあるものでした。

今年、編集委員になって、これまで一読者の視点でしか見ていなかった会誌「情報処理」が、誰かの手によって作られていることを改めて実感しました。そして新たな提案をして改革していく可能性を秘めていること、それを望まれていることなどを知りました。PTA役員も編集委員会もどちらも基本的にボランティアで成り立っています。前年度までを踏襲して済ませることだってできます。けれど、与えられた仕事をするだけでなく、自分自身も楽しみながら、そして女性視点・若手研究者視点から、少しでも自分が貢献することで、読者が1人でも多く楽しめるような紙面作りをしていけたら、とスタートしたばかりの編集委員会にワクワクしています。

この女性陣によるコラムがみなさんに楽しんでいただけるネタの1つになりますように。